

教員養成学部生における進路意思決定の遅延 － 3 回生 11 月時点で未決定の学生を対象に－

若 松 養 亮

Delay of Career Decision Making in Faculty of Education - Data of Junior Undergraduates in November -

Yosuke Wakamatsu

問題と目的

出口の見えない不況が続き、求職難、就職氷河期と言われて久しい。それに伴い、若者の労働や雇用にさまざまな問題が指摘されている。そのうちフリーターや無業者の増加（大久保, 2002; 小杉, 2003）の問題は、正式採用の減少という雇用・労働に関する構造的な問題に非があると思えることはできるものの、就職活動において企業と学生の求めるもののミスマッチが目立つこと（安田, 1999）、3 年間で 3 割に達する大学生の高い離職率（熊沢, 2001）といった問題からは、彼らの進路意思決定行動、ないしそれに伴う意識に関して、まだまだ改善を要する部分が多いと見ることができる。

折しも大学は、18 歳人口が減少し続け、増加が見込まれないなかで、生き残りを期するという意味もあり、国立大学でさえ、就職に関するサポートを行うことが珍しくなくなった（朝日新聞, 2003）。本学部でも 3 回生の 11 月期に全員出席を義務づける就職講座や各種講演会の開催、就職資料室の新設、教員採用試験対策講座の重点化等が行われた。しかし人的・財政的・時間的資源に乏しいことから、できることに限りがあり、そうしたガイダンスやサポートは、学生の現状を踏まえた効率的な支援を目指さなければならない。

意思決定がそもそも困難な課題（印南,

1997）であることに加えて、進路・職業に関する意思決定はなおいっそう難しい。というのは、購買行動などの他の意思決定課題に比べて重要度が著しく高く、やりなおしが難しいこと、やりがいや職場の風土など、数値で表しにくい属性が多いこと、実情が把握しづらい業種・職種も多く、また配属部署や上司・同僚の人柄など偶発的に決まる属性が少なからずあることといった特徴があるからである。こうした進路意思決定上の難しさは、得てして意思決定の遅れにつながる。就職協定が廃止され、企業の採用活動の開始が第 3 学年の後半にまで前倒しされる現状では、意思決定の遅れはそのまま内定獲得の可能性を減少させ、また就職活動が終了する時期を遅らせる。また公務員や教員の採用試験受験者においても、10 月上旬には教育実習も終了することから、11 月の就職講座までには自身の進路の方向性を定めておくことで、同講座も効果的・主体的な参加が望めるであろうし、試験対策にとっても有利になるであろう。しかし現状では、必ずしも多くの学生が意思決定を済ませているわけではない（若松, 2001）。

このような意思決定の遅れを取り上げてきたのが、米国で数多く行われてきた進路未決定（career indecision）研究である。しかしこれらの研究は、卒業を延期するほどの慢性的な未決定（indecisive 型と呼ばれるタイプのもの）

を解明すべき対象としており、それ以外の、規定通りに卒業していくものの意思決定が遅れている学生（undecided 型と呼ばれる）は、「発達の過程でふつうに見られるもの」（Slaney, 1988）などとあまり関心が払われていない。確かに、結局卒業までに進路の意思決定ができる学生であれば、「進路が決められない」という枠には含まれないであろうし、また研究上で未決定者と定義することも難しい。しかし上で述べたように、意思決定が遅れているだけで幾つものハンディキャップを背負うことが危惧され、また遅れるだけの理由や背景があるならば、それはまさにガイダンス等で改善を試みるべきことである。以上のことから本研究では、一般の学生に見られる進路意思決定の遅れという事象をとりあげ、その現状や実態を分析することを目的とする。

進路決定へのガイダンスを視野におき、意思決定の遅延という事象を理解するうえでは、「彼らはなぜ決められないか」、および「どのような状態で留まっているのか」という二点が問題となるであろう。前者に関しては、米国でのこれまでの進路未決定研究においても、antecedent (Osipow, Carney, & Barak., 1976)、reason (Jones, 1989)、factor (Chartrand & Robbins, 1990) というさまざまな枠組みで捉えられてきたが、本研究では、Gati, Krausz, & Osipow (1996) らが提唱した difficulty という、従来の尺度に比べて彼らが有する困難さを具体的・網羅的に捉える枠組みを用い、意思決定の障害となる強い困難さとはどのようなものか、また決定者が決定前に感じていたものと異なる困難さとはどのようなものかを明らかにする。後者に関しては、困難さからだけでは見えにくい、彼らの実像を明らかにする。例えば、彼らは選択肢をいくつか見いだしたうえで決められないのか、それとも選択肢がそもそも見いだせないのか、またできるだけ早く決めたいと考えているのか、まだ決めなくても大丈夫な時期だと思っているのか、といった点である。こうしたことは、進路未決定研究でもあまり問題にされてこなかったが、それは従来の研究における興味の中心が、強い不安を特徴とする indecisive 型にあり、そうした学生は自分か

ら来談してくるためかもしれない。本研究で対象とする undecided 型が多数を占める一般の学生においては、自発的に来談しないことがふつうであるので、上記のような実像を捉えることも重要である。また本研究では、未決定者の実像だけでなく、その比較対象となる決定者についても実像を捉え、大学生が進路を決め（られ）るとはどのようなことかを考察する。

本研究の対象は、本学部の3回生である。これは、本学部学生への教育や就職支援に資するためだけでなく、教員養成学部という目的養成の学部における特殊性も視野におくことを意味している。すなわち、多くの大学・学部が受験先の選択の際に学業成績によって選ばれ（下山, 1984）、しかも高校での進路指導が受験指導という形で行われている（下山, 1986）ことから、大学卒業後の進路までが大学・学部の選択において十分に考慮されることは少ない。これは本学部も例外ではなく、筆者が1997年度に入学直後の1回生に行った調査結果では、教員養成課程においても教職を「ぜひ目指そうと思っている」者が61.5%、これに「できるだけ目指そうと思っている」者を加えても80.2%である。すなわち、卒業後の進路を見定めて入学してきている学生が一般学部に比べて多いが、また同時にそうでない学生も少なからず含まれている。特に学生定員の3分の1以上が教員免許を卒業要件としないゼロ免課程である昨今ではなおさらである。したがって本研究では、進路の選択肢として教職を想定しているか否かによる相違も分析し、大学・学部の選択が彼らの進路意思決定に及ぼしている影響も併せて考察する。

方 法

1. 調査の概要

本学部の3回生が出席を義務づけられている11月上旬の就職講座において、質問紙を一斉配布し、終了時に回収を行った。本報告では、2000～2002年の3回にわたって収集されたデータを、分布などを確認したうえで、ひとまとめにして分析した結果を示す。その有効回答数は572名（うち女子389名）で、ゼロ免課程（情報課程；2002年度のみ環境教育課程が

加わる)の学生は内数で190名(33.4%)である。

2. 質問紙の構成

年度によって設問や項目の追加・変更があるが、基本的には3回の調査間でほとんど変わらない内容である。本報告の分析に用いられた設問は以下の通りである。

(1) 決定・未決定の定義

Zener & Schnuelle (1976)の指標を改定したものをを用いた。まず①考慮している選択肢を6つまで挙げさせ、さらに②前問で書いた選択肢のうち、「この進路なら目指すと決めてもう迷わないし、具体的に詰めるつもりがない選択肢はありますか(他にまだ迷っている選択肢があってもかまいません)」と教示し、1つ以上挙げた人を決定者と見なした。なお上記の「具体的に詰める」の箇所に※印が付され、「例えば銀行と決めたら、どんな銀行を目指すか、どんな職務を希望するかなど、もっと細かく考えていくことです」という注釈が付けられた。

(2) CDDQ-R 尺度

未決定時に有する困難さを測定するために、Gati et al. (1996)のCDDQ (Career Decision-making Difficulties Questionnaire)に改定を加えたCDDQ-R (若松, 2001)を使用した。この改定は、オリジナルのCDDQと比べて、未決定者が内省して自覚できる困難さの項目に限定し、「…だろうか」といった問いの形式に表現を変えたものである。さらに「理想の進路を見つけるために妥協や希望を捨てたくない」といった抽象度が高いものを、「好みが実現されなくても、選ぶべきだろうか」「興味や意欲が持てない進路でも、選ぶべきだろうか」などのように具体化した。以上の改定を加えた40項目(TABLE 1に示した)を提示し、未決定者には「あなた自身は現在、進路を選ぶに際して、次のそれぞれの問題にどのくらい悩まされていますか」、決定者には「…どのくらい悩まされましたか」と意思決定以前について尋ねた。評定は「1. 全然悩まされていない」～「6. すごく悩まされている」(決定者向けには「悩まされた」と過去形にした)の6件法である。なおこの尺度は、若松(2001)において、構成概念妥当性および信頼性が確認されている。

(3) indecisive 傾向の指標

本研究は undecided 型と見なせる未決定者を分析対象として想定しているが、調査対象となった学生のなかに indecisive 型の学生が含まれている可能性もある。ただ indecisive 型か否かの分類は、日本語でいう優柔不断さ(進路に限らずあらゆる意思決定面でスムーズに決められない性向)と特性不安(Spielberger, Gorsuch, & Lushene, 1970)の強さという特徴は指摘されるものの、臨床家によって導入された概念であるために明確な査定基準がまだ存在しない(Leong & Chervinko, 1996)。そこで本研究では、Gati et al. (1996)のCDDQに含まれていた「意思決定プロセスに先立つ困難さ」尺度のなかから「優柔不断」の下位尺度とされている4項目に着目し、同尺度の因子構造を確認したうえで、その因子得点を指標とする。

(4) 未決定者の状態

未決定者が興味ある選択肢を既に持っているか否かなど、意思決定がどこまで進み、どこで停滞しているのかを見る設問で、オリジナル版のCDDQに含まれていた項目を参考にして作成した。(1)の設問で判定された未決定者を対象に、「あなたは現在、進路を考えたり決めたりする過程の、どんな段階にいらっしゃるのでしょうか」と尋ね、回答は○か×を付ける2件法である。年度間で項目の構成・表現に僅かな差異があるが、複数年の調査に共通する項目(Fig. 3に示した)を分析する。なお項目3、6、8、9は、2年度分の調査でのみ使用した項目である。

(5) 決定できた経緯

決定者がどのようにして決めたかを見る設問である。若松(1997)における、意思決定者への面接調査結果等を参考に作成した8項目(Fig. 4に示した)で、(1)の設問で判定された決定者を対象に、「あなたがその進路を『もう迷わない』と思えたのは、どのような事情やいきさつがあったからでしょうか」と教示し、(4)の設問と同様に○か×の2件法で答えさせた。

結果と考察

1. 決定者・未決定者の概要とデータ一括化の検討

本研究における「決定者」の操作的定義、「目

指すと決めてもう迷わないし、具体的に詰めるつもりがない選択肢が1つ以上ある人」にしたがって被験者を決定者と未決定者に分けると、それぞれ317名と255名であり、決定者の割合は55.5%であった。半数弱の人たちが「もう迷わない選択肢」を3回生の11月時点で1つも持っていないということは、そうした遅延者への支援がやはり大きな課題となるであろう。なお決定者の割合を調査年度間で比較すると、年度の順に58.1、51.7、57.0%であり、偏りは有意ではなかった($\chi^2(2) = 1.96, n.s.$)。課程別にみると、教員養成課程では62.8%、ゼロ免課程では40.0%で、教員養成課程に有意に多い($\chi^2(2) = 26.59, p < .001$)が、年度による相違は有意ではなかった。性別では男子が59.4%、女子が53.2%で、差は有意ではなく($\chi^2(2) = 1.93, n.s.$)、年度による相違も有意ではなかった。また教職想定者の割合は決定者では69.7%、未決定者では42.0%と有意に異なっていた($\chi^2(1) = 42.77, p < .001$)が、この割合の年度間の差は有意ではなかった。課程別に見ると教員養成課程では80.1%、ゼロ免課程では11.6%と大きく異なるが、年度間の差はやはり有意ではなかった。他にも、CDDQ-Rにおける評定平均など、各指標に関して年度による差異はほとんどなかった。したがって、本報告では年度による相違はないものとし、一括で分析を行なう。

2. 意思決定以前に感じる困難さの構造

意思決定以前に学生が有する困難さを査定したCDDQ-R尺度をもとに、彼らがどのような困難さを有しているかを検討する。まず安定した指標を得るために、40項目の尺度に因子分析を行った。何通りかの分析結果を比較したところ、主成分分析による7因子解にプロマックス回転を施したものが、全ての項目がいずれかの因子に負荷が高く、また解釈が可能で、累積寄与率も十分に高く、固有値が1を切る位置でもあったことから、この解を採用した。その結果をTABLE 1に示した。これらの7因子は順に、Ⅰ「能力に関する戸惑い」、Ⅱ「適合へのこだわり」、Ⅲ「興味や好みの模索」、Ⅳ「選択方法に関する迷い」、Ⅴ「進路先の実情への不

安」、Ⅵ「現実的な障害」、Ⅶ「実現可能性への不安」と命名された。因子間相関は.271～.580とそれぞれの因子が弱く、もしくは中程度に関連しているが、高い相関ではないため、彼らが有する困難さを7つの因子によって査定することは決して冗長ではない。

4節以降では、この困難さの因子ごとに、未決定者が悩まされている程度を決定者の決定以前のものと比較するために、各因子の因子得点を用いる。

3. indecisive 傾向が高い被験者の抽出

本研究の対象となった学生たちは、卒業を延期するほどの進路未決定を抱えている可能性は少ないものの、調査の時点で全被験者についてそのように断定することはできない。したがって、indecisive の傾向がある程度高い被験者をここでは仮に indecisive 型の未決定者として、それ以外の未決定者を undecided 型、すなわちいずれ進路の意思決定を済ませ、卒業していくであろう未決定者と分けて分析する。

この類型化のために、Gati et al. (1996) のオリジナル版CDDQに含まれていた「意思決定プロセスに先立つ困難さ」尺度の因子分析を行った(TABLE 2)。この結果からは、第2因子が、「優柔不断」の4項目(2、5、8、9)が寄与しているので、この因子得点を indecisive 傾向の指標とする。ここではこの因子得点が+0.5以上の未決定者を indecisive 群と見なすと該当者は79名(32.9%)おり、したがって undecided 群は161名(67.1%)となる。

4. 未決定者が抱える困難さの特徴

前節で類型化された2群の未決定者と決定者の計3群で、CDDQ-Rの7つの因子得点を比較した結果をFig. 1に示す。全体的に indecisive 群の平均が正の方向に突出し、undecided 群は0に近い。決定者は負の方向に分布しているが、undecided 群との差は小さい。この結果を群を要因とする一元配置の分散分析にかけると、すべての因子において群の主効果が有意となった。続いてTukeyのHSD法による多重比較を行うと、indecisive 群と他の2群の差はすべての因子で有意であったが、undecided 群と

TABLE 1 CDDQ-Rの因子構造

質問項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	h ²
I 能力に関する戸惑い($\alpha = .926$)								
24 私の能力は、その進路が必要とするくらいまで伸びるだろうか	.851	-.079	-.126	.043	.013	-.019	.166	.735
25 私が自分で持っていると思う能力は、本当に他の人たちよりも優れているだろうか	.800	-.052	-.216	.088	.042	.026	.150	.677
23 その進路は本当に私の能力に合っているのだろうか	.795	.017	.130	.045	-.016	-.055	-.041	.742
22 私はどんな能力を持っているのだろうか	.747	-.173	.218	.115	-.026	.025	-.077	.683
38 自分では向いていると思う進路に、本当に向いているのだろうか	.746	.154	.070	-.017	-.107	.061	-.036	.677
39 もし私が進んだ進路に向いていなくても、いずれ自分は変わっていきけるだろうか	.641	.304	-.134	-.075	.100	.071	-.090	.611
26 自分の能力が不十分にも思えても、その進路を選ぶべきだろうか	.634	.010	-.105	-.011	.018	.045	.328	.651
37 どんな進路に私は最も向いているのだろうか	.585	.189	.355	-.024	-.062	-.043	-.113	.709
36 どんな進路に私は向いているのだろうか	.474	.200	.420	.084	-.094	-.080	-.100	.712
II 適合へのこだわり($\alpha = .882$)								
34 自分が進路に対して持っている好みは将来変わるのではないだろうか	.014	.796	-.050	.010	.134	-.071	.064	.699
13 私が何に興味や意欲を持つかということは将来変わってしまうのではないだろうか	.026	.624	.197	-.135	.153	-.037	.027	.578
35 進路に対する私の好みを実現されなくても、その進路を選ぶべきだろう	-.017	.587	.008	.192	-.095	.066	.251	.630
9 将来もっと自分に合った進路の選択肢が現われるのではないだろうか	-.085	.561	.136	-.038	.262	-.079	.085	.509
33 その進路は本当に私の好みを実現してくれるだろうか	.085	.533	.154	.168	-.025	.020	.014	.592
32 進路に対する私の好みのうちどれを最も優先すべきだろうか	.070	.505	.187	.119	-.040	.098	.016	.576
14 興味や意欲が持てないその進路でも選ぶべきなのだろうか	-.240	.445	.361	-.022	-.008	.199	.159	.529
40 私から見て向いていないように思えても、その進路を選ぶべきだろうか	.359	.404	-.012	-.145	.029	.132	.143	.548
III 興味や好みの模索($\alpha = .879$)								
10 私はどういう方向の進路に興味がある(意欲を感じる)のだろうか	-.038	.176	.912	-.058	-.050	-.013	-.106	.782
11 私はどういう進路に最も強く興味を持っている(意欲を感じる)のだろうか	.007	.189	.876	-.089	.041	-.052	-.143	.773
12 その進路は私が持っている興味や意欲と本当に合ったところなのだろうか	.171	.240	.635	-.102	.047	-.035	-.064	.661
1 自分が進むことのできる進路にはどんなものがあるのだろうか	-.013	-.051	.547	.155	.121	-.034	.185	.612
31 自分は進路に対してどんな好みがあるのだろうか	.018	.396	.485	.133	-.159	-.003	.025	.620
IV 選択方法に関する迷い($\alpha = .866$)								
27 良い進路選択をするにはどんな手順を踏まなくてはならないのだろうか	-.011	.035	-.122	.918	.019	-.039	-.011	.720
28 これから選べる進路やその特徴について、どうしたら正確で最新の情報が手に入られるのだろうか	.040	.077	-.042	.830	.077	-.053	-.002	.759
29 良い進路選択をするにはどんなことを考慮に入れなくては行けないのだろうか	-.008	.099	.042	.758	.043	-.045	.059	.728
30 自分自身についての情報をもっと手に入れるにはどうしたらよいのだろうか	.221	-.090	.041	.723	.023	.091	-.205	.643
V 進路先の実情への不安($\alpha = .810$)								
5 ぶつ、その進路に進んだ後はどういうコースをたどることになるのだろうか	-.201	.183	.113	.081	.691	.068	-.019	.636
6 その進路先の人たちと自分とはうまくやっていけるだろうか	.119	.196	-.344	.127	.672	.040	-.161	.527
7 その進路の特徴や性質(先制的、民主的、安定しているなど)は、将来変わってしまうのではないだろうか	-.088	.222	-.137	.075	.671	.138	-.106	.536
3 その進路先ではどんなことをする(させられる)のだろうか	-.113	.075	.292	.053	.661	-.157	.080	.674
4 その進路に進んだらどんな資質が求められる(必要とされる)のだろうか	.332	-.208	.182	-.128	.604	-.010	.083	.697
8 その進路では私の優れた面や大学で学んだことが活かせるのだろうか	.194	-.132	.180	-.125	.454	.141	.025	.423
VI 現実的な障害($\alpha = .721$)								
17 私が決意した進路のことを、私の大切な人たちにどうやって説得したらよいのだろうか	.003	.025	-.025	-.030	-.054	.779	.032	.587
18 進路の計画を立てる上で、性や年齢などによる差別をどうやって克服できるだろうか	.023	.069	.020	-.029	.081	.766	-.108	.622
19 自分にとって不都合な土地に行くことになるその進路でも、選ぶべきなのだろうか	-.011	.000	-.117	.054	.087	.655	.035	.484
20 私は自分が計画する進路のために必要なお金をどうやって用意したらよいのだろうか	.155	.024	-.051	-.094	.102	.636	-.097	.437
21 今の大学・学部・専攻は、目指す進路からすると不利なところではないだろうか	-.159	-.284	.421	.190	-.081	.509	.114	.560
VII 実現可能性への不安($\alpha = .715$)								
2 私がその進路に進める可能性はどのくらいありそうだろうか	.106	.175	-.145	-.038	-.047	-.097	.882	.737
15 採用される(合格する)可能性があまりなくとも、その進路を選ぶべきだろうか	.071	.292	-.096	-.087	-.104	.081	.751	.677
16 たくさんの時間とエネルギーが必要になるにもかかわらず、その進路を選ぶべきなのだろうか	.191	-.243	.246	.095	.191	-.066	.387	.557
因子寄与	11.351	9.082	10.117	8.591	7.991	5.989	6.736	
因子間相関	I	.507	.546	.462	.506	.311	.457	
	II		.443	.380	.356	.382	.271	
	III			.580	.443	.296	.447	
	IV				.430	.418	.451	
	V					.373	.464	
	VI						.424	

TABLE 2 「意思決定プロセスに先立つ困難さ」尺度の因子分析

質問項目	I	II	III	h^2
1. 私は進路を選ばなければならないことは知っているが、今は決めようという意欲がない(決めたいと思わない)	.822	.143	-.136	.711
7. 私は、時が来れば“正しい”選択ができるのではないかと思うので、今、進路を選ぶ必要はないと思っている	.780	-.021	.277	.668
4. 仕事は私の人生で最も大事なことでなく、したがって進路を選ぶという問題は私をそれほど困らせてはいない	.621	-.351	-.087	.542
5. 私はたいてい、何かに熱中したり思い入れを持ったりすることをさせている	.438	.315	-.037	.283
2. 何か物事を決めることは私にとってたいてい難しい	.174	.840	-.133	.716
9. 私はたいてい、失敗することを恐れている	-.090	.792	.015	.643
3. 私は、自分の望むことをすべてかなえてくれる進路があると信じている	.053	-.193	.768	.586
10. 私は、自分が選んだ進路に進むことで、個人的な問題(自尊心とか他人とのつきあいだすことの難しさといったこと)のいくつかが解決されると信	-.018	.067	.608	.387
8. 私は自分が決心したことに対して専門家か、誰か信用できる人からの確かめや支援が欲しいとたいてい思う	-.009	.466	.477	.507
因子寄与	1.928	1.887	1.226	
因子間相関	I	-.029	-.039	
	II		.140	

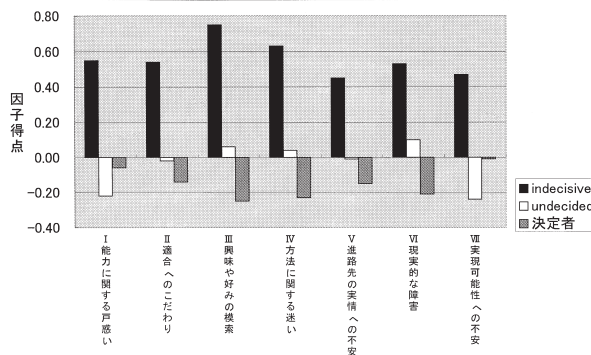


Fig. 1 困難さの7因子得点の比較

決定者群の差が有意なのは、因子Ⅲ（興味や好みの模索； $p<.01$ ）、Ⅳ（選択方法に関する迷い； $p<.05$ ）、Ⅵ（現実的な障害； $p<.01$ ）のみであった。これら3つの因子は、undecided 群の平均値も比較的高く、決定者の平均値が低いことから、未決定者全体と決定者のあいだで大きく差がつく困難さともなる。この3つの因子から浮き彫りにされることは、未決定者の特徴であるとともに、決定者の特徴でもあるであろう。すなわち、決定者は自己の興味（に合う選択肢）を明確にすることと進路の考え方や情報収集で迷うことが少なく、現実的な障害に困惑することも少ない。これは、決定者の多くが教員を志向していることと無関係ではないであろう。なぜならば、教師を志向する者の多くは早い時期からモデルとなる教師と出会うことが多く（若松，1997）、学部選択以前に、または少なくとも入学時点で志望を意識しているために、興味が明確で、なおかつ選択に障害がない人がこの学部を選ぶからである。また教師は他の職業と比べて、早い時期に決められ、また職業の様

子もわかりやすい（と感じられる）ために、情報不足で困ることが少なく、したがって選択方法に関して迷う可能性も低いであろう。このことについては、6節であらためて検討する。

他の困難さは、強い不安を特徴とする indecisive 型の平均は高いが、undecided 型の平均は低く、とりわけ因子Ⅰ（能力に関する戸惑い）とⅦ

（実現可能性への不安）の平均は、有意な差にはならないものの決定者群以下の値である。undecided 群の未決定者にとっては、こうした能力に関わることや、興味以外の適合の問題、勤務先の実情の問題は後回しになっており、まずは現実的な障害がなく、かつ興味を持てる進路を探索することが目下の悩みになっているといえるだろう。

以上の因子得点による分析では悩みがどの程度の強さかが見られないため、続いて各因子に高く負荷した項目の評定平均値で比較したのが Fig. 2 である。indecisive 群は、すべての困難さに一律に強く悩まされているわけではなく、因子Ⅰ（能力）、Ⅲ（興味・好み）、Ⅳ（方法）が4.5（評定4は「わりと悩まされている」、5は「だいぶ悩まされている」）を越えており、これらのことが彼らが決められないことのネックであることが示唆される。undecided 群ではⅣ（方法）のみがようやく平均4.0を越えており、概して悩まされる程度は弱い。4.0近辺に平均値がある因子は決定者でもⅠ（能力）、Ⅳ（方法）、Ⅶ（実現可能性）が該当し、undecided 群が決定者よりも何かに強く悩まされるために決められないという図式は妥当でないとも考えられる。では undecided 群は、なぜこの時期までに進路を決められないのであろうか。

5. 未決定者と決定者の状態像

前節の分析では、特に undecided 群が困難さに悩まされる程度において決定者とそれほど差がなく、彼らがなぜ決められないかが判然と

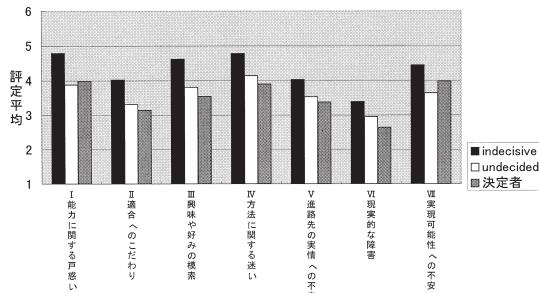


Fig. 2 困難さの7因子を評定平均で比較

しなかった。ここでは彼らがどのような状態で未決定でいるのかを見ることで、この疑問への示唆を得る。

Fig. 3 には、未決定者を対象に「現在どのような状態にいるか」について2件法で評定してもらった結果を、○をつけた人の割合で示した。indecisive・undecidedの両群とも、7割近くの人が「現実的で興味を持てる選択肢がある」(項目1)、また「全部併願しながら準備を始めてもかまわない」(4)という結果であり、意思決定が学年と調査時期にほぼ相応な程度、進んでいることを伺わせる。しかし、「新しい選択肢をできるだけ付け加えないで考えたい」(2)が2～3割、「最終的に志望するかどうかはおおよそわかっている」(6)も3～4割であり、「まだまだ情報を集めなければ」(5)が9割前後もいることから、「選択肢はあるが、

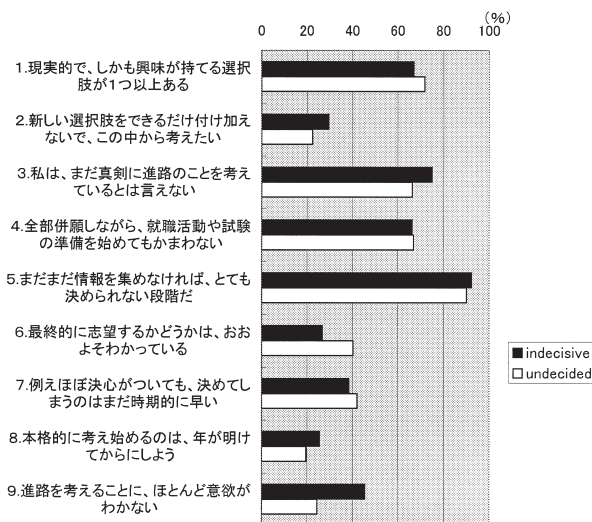


Fig. 3 未決定者はどんな状態にいるか

それには満足できないので、なお新たな選択肢を模索している」という未決定者像が伺える。彼らが、もう決めなければならないという危機意識を持っていないのかについては、項目7(決めてしまうのは時期的に早い)が4割前後、8(本格的に考えるのは年明けから)が2割前後というところから、全員ではないがそうした意識も持つ学生が少なからずいるということであろう。また項目9(意欲がわかない)では indecisive 群が undecided 群より有意に該当率が高かった ($\chi^2(1) = 7.22, p < .01$) が、この結果は、indecisive 群が進路選択に非常に悩まされた結果として意欲が低下した可能性を示唆する。

続いて、決定者はなぜ決められたのであろうか。Fig. 4 には、決定者に対して意思決定できた経緯を尋ね、同じく○がついた該当率で示した。まず目に付くのは、「これはどうしても志望したいという選択肢だったので」(項目2)、および「不安・不満はあったが、それ以上に魅力を感じたので」(6)の2項目が8割近くの高い該当率を示したことである。他方、「強く惹かれなかったが、現実的な進路として妥協して」(1)、「行き場がないのはいやと思って」(5)、「長い間気乗りがしなかったが」(10)といった消極的な態度で決めた人は高くても2割という低さである。また項目6と似ている4

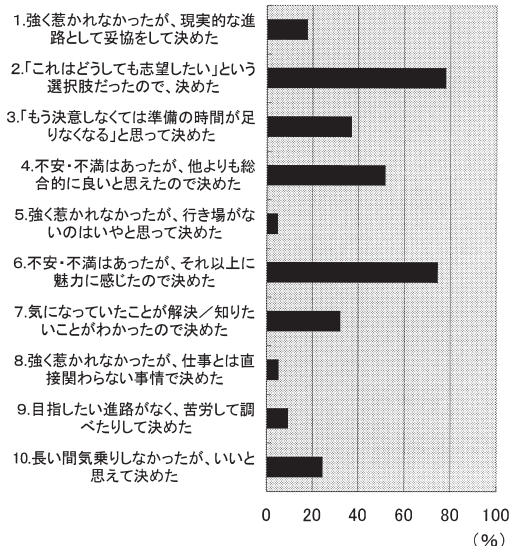


Fig. 4 決定者はどのような経緯で決めたか

(不安・不満はあったが、他よりも総合的に良いと思えたので)というやや妥協気味の内容のものは5割と、項目6に比べて高くないことを勘案すると、この時期までに決められた人の多くは心底惹かれる進路に出会えて決めている。未決定者が、選択肢は持ちつつもそれでは納得がいかなかったり情報の不足を感じていたりして決められていないのに対して、そうした不全感を感じない進路に出会えた人が決めていることが示唆される。

6. 教職を選択肢に含めることの影響

ここでは、教員養成学部ならではの変数として、教職を進路の選択肢として想定することの効果を検討する。4節で考察したように、本研究で見られた結果には、決定者の多くが教職を選択肢として想定していることの影響が示唆された。また未決定者においても、他の学部の学生とは異なり、教職という職業が現実的な選択肢として眼前にあることから、選択肢に教職を含めて考えている人とそうでない人では違いが

生じると予想される。

以上のことを確かめるために、undecided群と決定者群の比較に、進路の選択肢として教職を想定しているか否か(以下、教職想定)の要因も含め、4群で比較した結果をFig. 5、その結果に2要因の分散分析を行った結果をTABLE 3に示した。Fig. 5からわかるように、因子得点の平均が正の方向にあるのは教職を想定していない群であり、同じ undecided 群、あるいは決定者群においても教職を選択肢として想定しているか否かでかなり異なっている。分散分析においてもこのことの表れとして、4節において undecided 群と決定者群の差が有意となった因子のうち因子Ⅲ(興味や好み)とⅣ(選択方法)は、教職想定の主効果が有意であり、決定・未決定の主効果は有意ではなかった。また残る因子Ⅵ(現実的障害)においても教職想定の主効果が同じく有意であり、決定・未決定の主効果はその有意水準が1%から5%に後退している。因子Ⅶ(実現可能性)においては、4つの群のうち決定者で教職非想定群だけが正の因子得点平均を示しており、ここでも教職想定群の効果が見てとれる。

続いて、未決定者がどのような状態にいるか

TABLE 3 Fig. 5の結果に対して分散分析を行った結果

	決定/未決定 の主効果		教職の想定 の主効果		交互作用
I. 能力に関する戸惑い	1.022	n.s.	1.584	n.s.	1.109 n.s.
II. 適合へのこだわり	1.883	n.s.	0.322	n.s.	0.278 n.s.
III. 興味や好みの模索	3.711	n.s.	18.828	**	0.098 n.s.
IV. 方法に関する迷い	2.997	n.s.	8.682	**	1.953 n.s.
V. 進路先の実情への不安	2.201	n.s.	1.088	n.s.	0.001 n.s.
VI. 現実的な障害	6.341	*	14.123	**	0.000 n.s.
VII. 実現可能性への不安	7.975	**	8.719	**	1.997 n.s.

* $p<.05$ ** $p<.01$

TABLE 4 undecided群における未決定の状態が教職想定群と非想定群で有意に異なった項目

	教職想定群	非想定群
1. 現実的で、しかも興味を持てる選択肢が1つ以上ある	80.9	65.9 *
2. 新しい選択肢をできるだけ付け加えないで、この中から考えたい	35.3	13.3 **
5. まだまだ情報を集めなければ、とても決められない段階だ	82.4	95.2 *
7. 例えほぼ決心がついても、決めてしまうのはまだ時期的に早い	32.4	51.9 *

* $p<.05$ ** $p<.01$

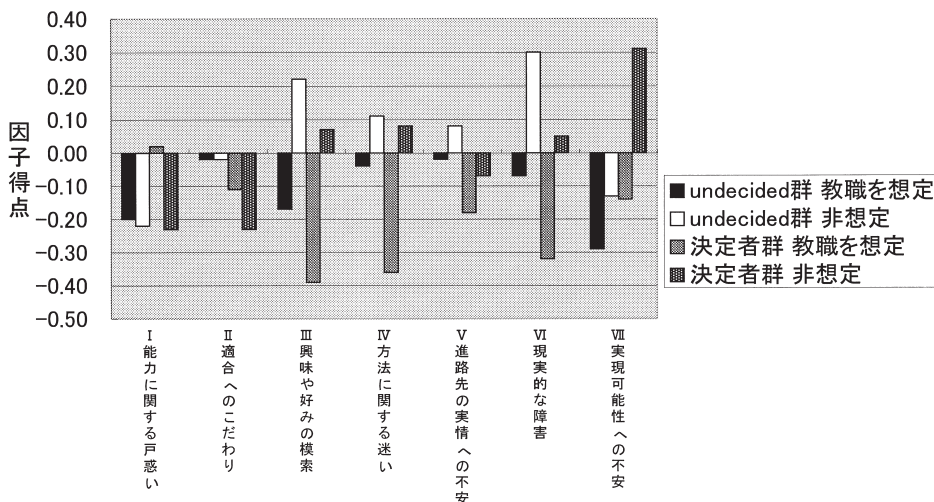


Fig. 5 undecided/決定者×教職の想定で困難さの因子得点を比較

を undecided 型を対象に教職の想定・非想定
の 2 群で比較した。それぞれの群で○をつけた
人の割合が有意に異なった項目を TABLE 4 に
まとめた。該当率がそれほど大きく異なってい
ないものの、全体的に教職想定群が非想定群
に比べて意思決定が進んだ状態にある。現実
には想定群が目指し得る教員採用試験よりも、
非想定群の多くが目指す企業の就職活動が半
年程度早く本番を迎えるにもかかわらず、非
想定群の意思決定が遅れているのは、企業に
は無数の選択肢があり、しかも教職に比べて
実情がわかりにくいと考えられる。

討 論

本研究の分析を通してまず注目すべき結果
は、undecided 群として分類された未決定者
が、評定平均の値から見ても、また決定者の
意思決定以前の状態と比べても、何らの困
難さにもそれほど悩まされていないという
ことである。彼らがどのような状態でとど
まっているかについての分析と併せて推察
すると、彼らの多くはそれなりに傾倒でき
る選択肢は有していても、情報不足等もあ
って自己の興味に十分にマッチする選択
肢を見いだせず、残り時間をにらみなが
らもお他の選択肢を求めているたり、既
有の選択肢についての情報を求めているよ
うである。他方、3 回生の 11 月という時
期までに決められた人たちは、強く興味
を引かれる選択肢に出会っており、例え
不安や不満があってもそれを凌駕する魅
力を感じて決めている人が大多数である。
以上のことから、両者を分けているのは
強く惹かれる選択肢に出会えるか否か
ではないかという推測が成り立つ。決定
者に決めた経緯を尋ねた設問の項目 9
（目指したい進路がなく、苦勞して調
べたりして決めた）の該当率はわず
か 1 割弱（Fig. 4）であり、紆余曲折
を経て決めた旨の他の項目も軒並み低
い該当率であることから見ても、未決
定者のように既有的選択肢に何らかの
不全感を感じたり、あるいは選択肢
自体が見いだせずにいた決定者は少
数派である。

進路の選択肢として教職を想定してい
ない学生になると、自分の想定してい
る選択肢に対

する不全感をもっと強い。undecided 群
と決定者を対象として、教職の想定・非
想定で比較した Fig. 5 では、非想定群
だけが正の因子得点平均を示した因子
が 7 因子中 5 因子と大勢を占め、また
意思決定の進み具合も遅いことが示さ
れた。教職を選択肢として想定しない学
生の意思決定がいかに困難であるかを表
している。逆に、選択肢の中に教職を含
めていれば、いざとなれば教師を目指
せばよいという安心感もあるためか、あ
るいはほとんど教師を目指すことを決
めつつあるためにか、困難さに悩まされ
る程度は低いのであろう。しかし教職を
想定している人たちにおいても、この時
期までに意思決定ができていないことは
確かである。彼らの未決定は、教職に
惹かれる程度が弱いだけなのであろう
か。フリーター研究で指摘されている、
やりたいことを仕事にしたいという気持
ちが強く、既存の進路に満足できない
（日本労働研究機構, 2000）という気持
ちや、自分には天職と言える職業がど
こかにあるはずだという適職信仰（神
戸新聞社, 2001）の心性などの、働く
ことに対する非現実的な思考・信念
（Stead, Watson, & Foxcroft, 1993）
が関係している可能性もある。また
教職を想定していない人の意思決定が
相対的に進みが遅いことについても、
無数にある業種・職種から選ぶことの
難しさ以外に、大学・学部を選んだ時
点から目的意識やキャリアに対する意
識が弱かった可能性も考えられる。

困難さの 7 因子のなかで、indecisive
傾向の強い未決定者や、弱い未決定者
のなかでも教職以外から決めようとし
ている人たちは、自身の興味や好み
が不明瞭で、選択方法について迷
いがあるという特徴があった。したが
って、まずはこれらの点に関してガイ
ダンスを行うという方針が立てられ
る。indecisive 傾向の強い人は、そ
の他にも能力や実現可能性について
悩まされており、進路に関するアド
バイスや情報収集と併せて不安軽減
の介入が有効という指摘（Mendonca
& Seiss, 1976）がある。しかし
今回の類型化は indecisiveness を
特性論的に扱った場合のものであり、
困難さの評定平均がそれほど高くない
因子も見られること、および未決定
者の状態像が undecided 型とほとん
ど

違わないことから、彼らに対しても同様のガイダンスを行う意味はあると考えられる。また undecided 型の多くが、3 回生の 11 月時点でもなお他の選択肢を求めていることも明らかになったが、そうした行動を支援するとともに、新たな選択肢はタイムリミットを定めて取り組ませることも重要である。

引用文献

- 朝日新聞社 2003 救え就職難 国立大も汗 朝日新聞 11 月 15 日版夕刊 (大阪本社発行)
- Chartrand, J. M. & Robbins, S. B. 1990 Using multidimensional career decision instruments to assess career decidedness and implementation. *Career Development Quarterly*, 39, 166-177.
- Gati, I., Krausz, M., & Osipow, S. H. 1996 A taxonomy of difficulties in career decision making. *Journal of Counseling Psychology*, 43, 510-526.
- 神戸新聞社 2001 フリーターという生き方 (2) 適職信仰 神戸新聞 1 月 3 日付け (<http://www.kobe-np.co.jp/rensai/freeter/freeter2.htm>)
- 熊沢誠 2001 日本の能力主義の現在と教育・職業訓練システム 教育 4 月号, 6-21.
- 印南一路 1997 すぐれた意思決定 中央公論社
- Jones, L. K. 1989 Measuring a three-dimensional construct of career indecision among college students: A revision of the Vocational Decision Scale-The Career Decision Profile. *Journal of Counseling Psychology*, 36, 477-486.
- 小杉礼子 2003 フリーターという生き方 勁草書房
- Leong, F. T. L. & Chervinko, S. 1996 Construct validity of career indecision: Negative personality traits as predictors of career indecision. *Journal of Career Assessment*, 4, 315-329.
- Mendonca, J. D. & Seiss, T. F. 1976 Counseling for indecisiveness: Problem-solving and anxiety-management training. *Journal of Counseling Psychology*, 23, 339-347.
- 日本労働研究機構 2000 フリーターの意識と実態 - 97 人へのヒアリング結果より - 調査研究報告書 No 136
- 大久保幸夫 2002 新卒無業。 東洋経済
- Osipow, S. H., Carney, C.G., & Barak, A. 1976 A scale of educational-vocational undecidedness: A typological approach. *Journal of Vocational Behavior*, 9, 233-243.
- 下山晴彦 1984 ある高校の進路決定過程の縦断的研究 教育心理学研究, 32, 206-211.
- 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- Slaney, R. B. 1988 The assessment of career decision making. In W. B. Walsh, & S. H. Osipow (Eds.), *Career decision making*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushene, R. E. 1970 *State-Trait Anxiety Inventory manual*. Palo Alto, CA: Consulting Psychological Press.
- Stead, G. B., Watson, M. B., & Foxcroft, C. D. 1993 The relation between career indecision and irrational beliefs among university students. *Journal of Vocational Behavior*, 42, 155-169.
- 若松養亮 1997 教員養成学部学生における教職志望意識の変化に及ぼす要因の検討 (2) - 教職に対する「気がかり」と「魅力」の認知を中心として - 進路指導研究, 18(1), 1-8.
- Zener, T. B., & Schnuelle, L. 1976 Effects of the Self-Directed Search on high school students. *Journal of Counseling Psychology*, 23, 353-359.
- 若松養亮 2001 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて - 教員養成学部の学生を対象に - 教育心理学研究 49, 209-218.
- 安田 雪 1999 大学生の就職活動 中公新書

謝 辞

本学部の就職講座での調査実施にあたり、当該年度の就職委員会の先生方、就職担当の事務の方々にご協力をいただきました。ありがとうございました。また回答にご協力いただいた学生のみなさまにもお礼を申し上げます。